

力石咲 ステイトメント

ニットで温かな世界征服。これがわたしのミッションだ。

編み物との出会いは2004年の作品《ManGlobe》である。人は毛糸や編み物に対し、どんなイメージを抱くだろうか。多くの方は、温かく柔らかで、やさしいというイメージをもっているだろう。わたしもそうだ。よって、世界とのコミュニケーションをコンセプトに制作した《ManGlobe》を編み物で形成したのはごく自然なことだった。この作品で、一本の糸が面となって無限に広がっていく不思議さ、ものに覆いかぶさった時に中身の形状に従順に形を変える可変性、無機的なものを有機的に変換してしまう柔軟性という編み物の性質に惹かれ、可能性を探りながら創作活動を開始した。

2009年の《トラベリピング》をきっかけに、わたしは編み物を外に連れ出した。2週間のゴールドコースト滞在中、現地での生活や観光をしながら作品をつくるこのプロジェクトでは、部屋に籠って作品を作るのではつまらない。自分が訪れた先々のものとコミュニケートして自分の痕跡を残していくと、出会った人やビーチの流木、街中のベンチを即興で編み包んだ。すると編み包まれた人と他者、流木と人、ベンチと人とのコミュニケーションも生まれたのである。

編み物は紐状の素材があれば場所を選ばずどこでもできる。そしてそんな原始的であるがゆえに世界中の人が知っている技法なのだと思う。ニットに対する先入的なイメージや日常の風景があるから、街中のものが編み包まれているという状況が違和感になって、人との、人と人との新たなコミュニケーションが生まれる。《トラベリピング》から始まった、新たなコミュニケーションを紡ぐプロジェクトは《旅するニットマシン》《ニット・インベーター》によって、人と空間、人と街を繋ぐものへと拡張している。

わたしにとって編み物はコミュニケーションメディアである。一本の糸が編まれて面となりどんどん広がっていくように、私と対象物から始まったコミュニケーションが、対象物と鑑賞者、鑑賞者と鑑賞者へと多角的に広がっていくことを願う。人間と土地、空想と現実、さまざまな関係性やその背景に着目しながら編み物で包んでゆく作業は、世界をゆるやかに繋いでゆく作業であり、壮大なインスタレーションの一端である。

近年わたしは自然に関心がある。きっかけは2019年《ニット・インベーター in 新豊洲》だ。このプロジェクトでは約2ヶ月間をかけて、建物を編み包み、そして解くという屋外作業をした。まだ暑い9月上旬、地上よりも太陽に近い位置でギラギラ照りつけられながらの作業。時には雨風に晒され、震えながらの作業。日々黙々と、重力によって下へと垂れる糸のバランスを見ながら配置していった。綿糸とひたすら向き合っていく中で、その感触が化繊とは異なることも感じ始めた。さらに関東地方を直撃した2度の大型台風にも向き合うことになった。作品の無事をひたすら祈った。2ヶ月が過ぎる頃には太陽に紫色を吸収されて色がなくなっている糸もあった。

この経験から、自然の圧倒的な力を感じ、また自然には逆らうことができないという想いを強くした。それならば、自然とコミュニケーションしたい。そう思うと、日光によって色が吸収されてしまうことや重力によってたんでしまうという現象もポジティブなものと捉えられる。これらの現象は時と共に増していくので、経年ということについても強く意識する。また糸についても、綿糸のような自然素材から作られる糸はやがては土に還る。輪廻する。そしてここでも時の流れを意識する。

今わたしは、自然、時間、輪廻をテーマに作品を作っていきたい。